

## 第3回須賀川市立学校長会議

11月8日（水）に、令和5年度第3回須賀川市立学校長会議が開催されました。冒頭の教育長挨拶では学校訪問について話がありました。教育長が年度始めに各学校にお願いした4つの視点「安全・安心な学校づくり」「協同的な学びの推進・深化」「小中一貫教育モデルの推進」「働き方改革の推進」について感想を述べられました。特に『協同的な学びの推進・深化についてはまだまだ理想に近づいていない。教職員が足並みを揃えて学校が内側から変わらないとならない。同じ方向を見て推進してほしい。』と熱い思いを語られました。



講義では、教育支援センター（教育研修センター兼務）指導主事の庄司康生先生から、学校改革の第一人者 デボラ・マイヤー先生についてと子どもを育てる（校長“Head Teacher”の役割）について講話がありました。

- ・ 校長の姿勢:「私の学校に行くのではない!彼らの学校 (their school) に行くのだ!!」
- ・ 担任の姿勢:「私は、(教科の専門家ではなく) トーマスの専門家!!」(一人一人の子どもにどんなストーリーがあるかという意味での子どもの専門家)
- ・ 「覚えることは考えること」(ブランズフォード) 教えられて覚えたことは

忘れる。考えたことは忘れない。深く考えたことは一生忘れない。

## 就学についての説明会のお知らせ

令和7年度春に入学するお子さまで、就学について相談してみたいとお考えの保護者の方々に、「就学相談」や「特別支援教育」についての説明会を開催します。(事前申し込みは不要です)

- 1 日時 令和5年12月5日（火）午後1時30分から3時まで
- 2 場所 須賀川市役所（八幡町135）4階 会議室D（担当 三瓶 電話0248-88-9168）

## 「相互障害状況」から「相互輔生」へ

東京大学名誉教授で教育心理学者である梅津八三先生は、盲聾障がい児へのかかわりを通して、障がいの捉え方について「相互障害状況」と「相互輔生」という言葉で説明しました。「相互障害状況」とは、障がいのある子どもとのかかわりの中で、かかわる者がとまどい、つまづいている状況で、障がいのある子どもに対してどう対応してよいかわからず、かかわり手も同じく障がいの状態にあると説明しています。また「相互輔生」については、互いに生きることを助け合うこととして、「相互輔生」のためには互いに理解し合うことが必要であるとしています。障がいがあるなしにかかわらず、目の前に指導困難な子どもと出会うと、この子は発達障がいの診断を受けているから、保護者の育て方が悪いからと、子ども側に原因を求めているのでしょうか?実はその子どもにかかわっている教師自身も障がいの状況にあるということに自覚する必要があると思います。お互いに理解し合うためには双方向のコミュニケーションが成り立つことが必要です。そのためには教師が子どもの思いや考えを理解して、子どもの思いに寄り添った対応が必要となります。それはまさしく子どもの存在そのものを認め、人間の多様性を尊重していくことであり、共生社会の礎を築くものではないでしょうか。

## コラム 教育のイノベーションと教師たちのMI 《コラム No.04》

今回は、目を転じて世界の状況からMI（不可能を可能にするミッション）を見てみましょう。

ウーマンリブに象徴される民主主義的運動は1960年代に始まり、80年代は人権と民主主義に関わる研究や活動が盛んな時代でした。授業も、一斉スタイルから4人グループへの転換がカナダから始まったのが80年代です。筆者はこの頃大学院生でしたが、リフレクション、カンファレンス、多様な視点による羅生門アプローチ等、今の学びと授業研究のほとんどがこの時期に胚胎されていたように思います。

平成元年(1989)に幼稚園教育要領が大きく改定されました。それまでの30年間、小学校の教科に則った区分で「領域」が設定されていたことを根本的に転換し、幼児が主体的に育つ姿を五つの「窓」から見るという趣旨で5領域が設定されました。当時の文科省幼児教育関係者は「幼児教育から初めて、日本の教育を子ども主体の教育に転換していく」と話していました。今の言葉で言うならば、学校教育のわが国におけるイノベーションは80年代の最後の年に幼児教育から始まったと言えるでしょう。

小中はどうでしょうか。TIMMS(国際理科数学教育動向調査)の分析を主導したE.クリーメ氏は、1995～2015年の20年間に、日本の小グループ活動実施度は最低から最高レベルになり、同時に世界で小グループ活動と学力は負から正の相関に変わり、特に日本でその傾向が著しいと話しています。国立教育政策研究所、東大、ベネッセの調査によれば1990～2015の25年間で日本では小中ほとんどの教科において子どもたちの「教科が好き」度合いが上がり、理解度も大幅に向上しています。日本の教師たちはある意味、教室でのイノベーションに尽力してきた立役者と言えるでしょう。そして新学習指導要領「主体的・対話的・深い」学びは幼児教育からの流れを受け継ぎ、広げるものと言えるでしょう。

しかし、学校や教室(1学級の定員数)、教師数等、肝心の学校や教室のイノベーションは全く手付かずです。それは失われた30年どころか、失われた60年…のように思われます。賃金も上がらず、学校や教師の状況がどんどん悪くなる一方のわが国の状況は本当に嘆かわしいです。

さて2022年、国連は日本政府に特別支援学校・学級の廃止を強く求める勧告を出しました。世界ではユネスコのインクルージョンの考えに基づき、障がいによって排除も差別もされない教育が進められています。須賀川市が推進している「一人残らず子どもの学びを保障する」協同的な学びは、同じ考え方です。日本政府・文科省はこの勧告に反発しましたが、学校に伺って子どもたちの様子を見るたびに思うのは、発達的な課題のある子こそ主体的・対話的・教科の本質に沿った学びを求めているように見えます。学ぶ対象との対話的な関係、何より学びにおける他者が必要であり、体験生活にはじまって「もの」「こと」「人」との対話の学びが必要と感じます。この点について筆者は直接の専門ではないので、これから教師のみなさんと一緒に考え学んでいきたいと考えています。最も大きなMIが、ここにあるような気がします。どうぞ、よろしく願いいたします。

## ペアレントトレーニングについて

10月28日(土)に健康づくり課主催の子育て講演会があり、福島医科大学看護学部の佐藤利憲先生を講師として、須賀川市民交流センターteteteを会場に「親も子も笑顔で過ごそう～ペアレントトレーニングをおして～」の講演がありました。内容は親子のかかわり方についてでしたが、教師と子どもの関係づくりにも活かされる内容でしたので、一部紹介します。

ポイント1 子どもの行動を3つに分類



ポイント2 ほめるポイント

- ① にこやかな表情
- ② 相手の目を見ながらやさしい視線
- ③ ほがらかで穏やかな口調
- ④ タイミングよく温かな言葉やしぐさ

ポイント3 最も重要なポイント

